



around the world

カストロ家の支配続くキューバ

アジア経済研究所主任研究員 山岡加奈子

キューバのラウル・カストロが今年四月、第八回共産党大会において、かねてから約束していた通り、党第一書記の座から退いた。これで名目上は、一九五九年の革命成功から続いたフィ

デルとラウルのカストロ兄弟の統治が終わったことになる。しかし筆者は、実質的にはキューバ政府の権力は、引き続きカストロ家に掌握されると考える。

キューバではソ連崩壊後の経済危機の中でも、フィデル・カストロもラウル・カストロも、基本的に中国・ベトナムのような市場経済メカニズムの導入は行わなかった。革命以来最悪の経済危機となった一九九〇年代前半は、危機に対応するためにやむを得ず改革が行われたが、経済がプラス成長に転じると、九六年に改革は中断した。また、二〇〇一年からのベネズエラとの石油と医療サービスのパートナー契約により、改革しなくても経済はプラス成長を記録した。貿易赤字をサービスマイナス貿易の黒字で補い、二〇〇〇年代以降キューバの経常収支は、リーマン・ショックの時期を除くと、統計の入手

が可能な一六年まで一貫して黒字である。

しかし、非効率な中央集権的な経済構造は温存され、改革を望む声は強かった。フィデル・カストロが〇六年に突然の病气により引退を余儀なくされ、実弟ラウル・カストロが跡を継いだ時、多くの国民は、ラウルがフィデルよりも大胆な経済改革を実行してくれるのではないかと期待した。しかし結局、大きな改革は行われなのまま、ラウルは退任した。

ラウル退任直前の二二年一月から、外貨交換可能な通貨と交換できない通貨を使い分けた二重通貨制度を廃止し、自営業の職種を大幅に拡大するという、おそらくラウル時代の二三年間で最大規模の経済改革が実施された。これはコロナによりキューバ経済が、成長率マイナス一%という過去二五年間で最大の落ち込みを記録し、国民

の不満が高まっていたからである。それでも党大会ではラウルが、改革には限度があると示唆しており、今後経済改革がさらに大きな進展を遂げるかどうかは不透明である。

一方、政治的には大きな変化はなさそう。今年九〇歳になるラウルがどこまで政治的決定を続けるかは彼の健康状態にもよるが、現在のところは公職から退いても院政を続けるのではないかと考える。ちょうど中国の鄧小平が引退後も影響力を行使し続けたのと同じである。それは党大会で具体的に今後の政治・経済政策について演説したのはラウルであり、第一書記をラウルから譲られたディアス・カネル大統領ではなかったことに表れている。

ラウルが健康上の理由で政治に介入することが難しくなっても、カストロ家には二代目が控えている。特にラウルの娘の一人デボラ・カストロの元夫



2019年5月、メーデーのパレードに出席したラウル・カストロ
共産党第1書記(右)とディアス・カネル大統領(AP/アフロ)

ルイス・アルベルト・ロドリゲスは革命軍の高官であると同時に、軍の国営企業コングロマリットのトップを務めており、以前から海外ではラウルの真の後継者とみなされている。ラウルの息子で軍の士官であるアレハンドロも、ルイス・アルベルトとともに強い影響力を有すると考えられている。他

方フィデルの子どもたち、孫たちは、今のところ政治の中枢からは距離を置いているようである。

なお、前述のルイス・アルベルトやアレハンドロを含め、ラウル・カストロ家の二代目・三代目は、だれも政治家としての公職にはついていない。表向きの公職はディアス・カネル大統領のような若手テクノクラートを据え、背後からカストロ家の二代目たちが指示を出すという構図が確立するのではない。

ただ、ラウルをはじめとした革命第一世代が名実ともに退場した後、彼らカストロ家二代目の権力基盤が強固なままかどうかはまだわからない。革命軍を掌握できれば、大統領や首相のような政治家たちの不満を抑えることができる可能性はあるが、軍の中で離反者が増えれば、指導層の中で力関係が変化するかもしれない。●